

3 大間知篤三の中国経験と日本民俗学

大間知篤三は東大出身のエリート知識人であり、日本学生運動の中核である新人会の重要成員であった。そこで培われた研究会の習慣、理論的思考、そして組織的活動力は、大間知に優秀な研究者と運動家の素地を与えた。大間知は共產黨員という身分で検挙されたが、出所してから転向者のための思想機構・大孝塾研究所（のち国民思想研究所）に勤めながら、柳田国男の門下となり、同門の他の若きエリート知識人と一緒に日本民俗学の中核組織木曜会を結成した。民俗学に開眼した彼は、精力的な調査と研究を行う一方、組織的にも持ち前の活動力を発揮し、中央の若き指導者の一人として初期日本民俗学の発展に大きな役割を果たした。

日中戦争が始まって中国との関わりが増えていく中で、大間知は、守随一に次いで新天地を求めて満洲に赴いた。しかし、建国大学では、満鉄調査部に赴任した守随と同じように、植民地支配に調査研究の経験と実力が直接動員されることになる。

大間知は満洲という土地で、柳田民俗学の「フオルクス・クンデ」としての性格を改めて認識するようになったものの、満洲での応用を否定し、満洲において民族を対象とする民族学が主であり、民俗研究（＝風俗習慣についての研究）はそれに包括されるべきと理解している。日本で柳田が民族学に対する民俗学の優位を強調したことから、大間知の満洲における民族学の優位の強調は、形式上の相違を超えて、日本人の優位を前提としている点で共通している。大間知は満洲で精力的に民族調査研究を行っていたが、しかしその民族調査は頗る政治的な視線を有するものであった。

日本民俗学にとって大間知篤三の役割は「現地組織者」として理解することが可能であろう。大間知は満洲赴任の当初、頻繁に日本民俗学に発信していた（表17参照）が、しかし一九四〇年の後半から少なくなり、一九四一年

表17 『民間伝承』 大間知篤三関係内容（1939～1941年）

発行年 月／号数	内 容	備 考
1939年 3月／4-6	「学会消息 木曜会」大間知新京へ本 月下旬出発	守随通信：明日から吉奉線の 背後地経済調査
4月／4-7	「大連にて」到着早々友達と一緒、温 いのに驚く	守随通信：満洲支部できそう、 岡川栄蔵と会う
5月／4-8	「大連にて」二人とも達者、大連新京 間近く感じる	守随通信：会の寄書に感謝、 大間知とよく会う
9月／4-12	「札幌屯にて」、女郎花、木多く水清し、 ロシア人多い	
11月／5-2	「京城にて」京城帝大宗教学社会学研 究室訪問、鶴、コ字型民家多い	
12月／5-3	「吉林にて」満族人がゆかしい、その 落魄に感無量、候家祭、薩満調査、守 随と偶然同宿	守随通信：土着資本実態調査 で大間知に出会う、薩満調査 同行、雪
1940年 1月／5-4	「上海にて」11月24日上海に、菊、河蟹	
8月／5-11	「新京にて」来満以来発表なし、『民間 伝承』の問題と関連して投稿する予定、 瑗瑯調査の準備	
1941年 3月／6-6	「始良郡加治木町にて」西表、石垣、 竹富、宮古、那覇、首里、糸満、知念村、 鹿児島の大山彦一の生家に、五年前霧 島別れして同町薩摩屋一泊を回想	(第一信) 竹富第三夜 大山彦一通信：昨年末台北社 会学大会後石垣、竹富で調査、 大間知同行。
8月／6-11	「学会消息」新京民俗同好会設立、大 間知の講演	
9月／6-12	「富錦城にて」夏に学生5名引率して 松花江と黒竜江の合流点辺りを調査	
12月／7-3	維持会員に〔新京〕大間知、守随	直江広治通信：大間知中心の 同好会と連絡する意欲 沢田四郎作通信：長岡博男と 大間知の寄書を受け取る

出典：『民間伝承』各号より作成。

九月以降、通信そのものが途絶えた。一時日本民俗学の議論と関連する形で寄稿すると言ったものの、実際にはその行動がなかったのは、研究活動の本格的な展開に伴い、満洲での研究と日本での研究の異質性を感じ、その間の比較の可能性について否定的な認識を持つようになったためと思われる。

彼は満洲での民俗学の可能性について否定的であったが、新京民俗同好会や満洲民族学会の設立と活動に積極的に関わる中で、日本民俗学の影響を拡大していた。たとえば、彼は

機関誌の創刊号に『民間伝承』を紹介しているが、そこで民間伝承の会の成立の経緯や一九四二年以降の変化などを紹介し、柳田の功績を讀え、「『民間伝承』は専ら日本の民俗、日本の民間伝承を対象としてゐる。然し我々満洲を研究対象とする者も亦、ここから無限の教示を得ることが出来る」⁽⁹⁴⁾と強調している。

『満洲民族学会会報』一一一の「民族学と民俗学」の論法はその典型である。日本民俗学の本質が「日本民族学」であるという言葉の転換が、「日本民族学」を中心に据えるべき「大東亜民族学」の一つとして展開される満洲での民族学にとつても、日本民俗学が高い価値があるという主張につながる。そして「数字から見る民俗学もある」というように当時の日本民俗学では受け入れられない独自の民俗学理解を示すことによって、満洲で農村実態調査に従事する人々の民俗学への関心を高めた。大間知の精力的な活動の結果、後述するように、満洲から多数の関係者が民間伝承の会の会員となり、内地以外に日本民俗学を發展させる際、満洲が最も有力な拠点の一つになり得るという認識を、日本民俗学の中心部に抱かせることとなった。